

# 美術がまちに繰り出す 人・まち・歴史・風土・コミュニケーションの場 アート公民館

■展覧会(出展作家:佐藤裕一郎)

2009年11月27日~12月6日 芝川鑄造

■シンポジウム 11月28日 川口市立アートギャラリー(アトリア)

コーディネーター:岩崎敬(環境デザイナー・フランス水アカデミー正会員)

パネラー:堀場弘(建築家・東京都市大学客員教授)、橋本信一(映画監督・日本映画学校専任講師)、フロランス・デッポー(異文化コミュニケーション・成蹊大学非常勤講師)

## 鑄物工場での美術展×アトリアでのシンポジウム

### 平成の「光琳・宗達」川口に降臨? ~新進気鋭画家との出会い~

「実物至上主義」という言葉があります。デジタルコンテンツ花盛りの時代においても、ものの本質は実物を見ないと分からないということでしょうか。しかし、画家・佐藤裕一郎さんの作品にはこの原則は当てはまらないと感じました。なぜなら、二次媒体である印刷物からさえもその「迫力」が見る側に伝わってくるからです。

最初の出会いは、《shadow in soil 071》というタイトルの作品。2.2m×11.0m超の巨大な六曲一双屏風のようなしつらえで、本プロジェクト「美術がまちに繰り出す」の告知用のポスター等の表紙を飾ったものでした。(しかし残念ながら、あまりにも現場と融合しすぎると理由から、画家の意向で出展が急遽見送られてしまいました)そしてこの作品を目の当たりにした時、私の脳裏に思わず、「琳派」の二文字が啓示されました。

《shadow in soil 071》は、華麗さと豪快さ両者を併せ持っているため、装飾性豊かで華麗な

琳派の巨匠「光琳」というイメージには合いません。では誰の作品?何かヒントになるものはないかと画集をひもとくと、一つの絵に巡りあいました。今までの胸のつかえが晴れ安堵感が広がりました。それは、「宗達」の代表作で私淑する画家たちも模倣した「風神雷神図」でした。しかも、金地の画面に描かれた神々の、特に右隻風神の足元に描かれている雲状の描写に目が釘付けになりました。そこに見られるたらし込みでの黒雲を思わせるモノクロームの世界。空間の中の光を表現する線とも面ともおぼしき箔足と墨の巧みなグラデーションに。おもわず、この著名な宗達画から神々の姿を消去した後に残された世界に、この作品《shadow in soil 071》の面影を見ました。

その時この画家に、川口の文化資源である鑄物工場の大空間と対話をしてもらいたいという願望が、自然と胸の奥から湧き起こってきました。こうして、市内有数の伝統的な溶銑炉を備えた昭和40年代築鉄骨造の工場での展覧会が実現することになりました。

幸いなことに、展覧会撤収時にビッグニュースが舞いこみました。それは、ニューヨークのチェルシーにあるディロンギャラリーの二人のギャラリスト

の表敬でした。来年ニューヨークでの、画家の作品との再開が今から待ち遠しく思われます。

### シンポジウム ~アート公民館 のこと~

創造する「人」を育む場。「歴史」と「風土」を記憶する場。人々が集う「コミュニケーション」の場。創造する「まち」を創る場を文化でつなぐ「アート公民館」が、川口のまち中に次々と出現すればとても日々の暮らしが楽しいものになってくるとの思いが、この言葉には込められています。今回企画協力をいただいた岩崎敬さんの地元川崎新百合丘にある京風居酒屋で、この構想と名称が誕生しました。

公の民、市民、昔風に言うとし市井の人々が集う場。「寺子屋」なる言葉がありますが、寺や神社の境内は古くは江戸時代から人々の集う場でした。そこで、数々のコミュニケーションが、そして文化が生まれました。時は流れ、戦後その役割を担う場が公民館となりました。しかし、現在では都市化や地域社会の成熟に伴い、その役割も著しく希薄になってきており、昔の勢いはありません。

そこで、今回美術をツールに新たな場作り。人が出会い、会話を介し、この場を文化芸術の力で再生し、町の風土や歴史を伝える。これが

「アート公民館」の役割です。今一度コミュニケーションの場の復活を、との想いを込めて。

今回のシンポジウムでは、さまざまな貴重な意見やキーワード、ヒントが聞かれました。その一部を以下に紹介します。「文化芸術振興のための文化株の発行」「町のルーツ探し」「歴史を知るための広報や法整備の必要性」「町の人たちが郷土川口を盛り上げ、再認識するような仕掛け」「別の文化との融合」「資源や空間の使い方」「文化力はコミュニケーション力」「空間のサイン、風景」「文化のある町」、また「外から人が訪れ、経済的な刺激が必要だ」「キューポラのある町の風景を残したい」「川口には多くの素晴らしい資源がある」「『文化』は人だ」「文化は長いスパンで考えるもの」「センス、価値を見出す」「過去と現在をつなぐ」「ものを作る、見る、評論する」「人の生き様、生き方自体がアートだ」「自分の人生や生活をデザインする」……などなど。

### これから ~逆境の時代にこそ「文化力」を~

金融危機に端を発する世界同時不況の波は、言うまでもなく文化芸術の世界にまで及んでいます。このような渦中、展覧会場に掲出された画家のメッセージにとっても心打たれました。「この

芝川鑄造に佇んだ時、ここで生み出されてきたものが、どれだけ町の産業を支え、歴史を作り上げてきたのかは容易に想像できた。この町には特殊な技術を持った職人の方が多いと聞けが、不況の煽りを受け、工場と共に職人さえも姿を消そうとしている。この現実、もはやどうしようもないけれど、そのような多くの人々の創造力がこの町を支えてきたはずである。人々のもの作りへの情熱が漂う、この芝川鑄造という歴史ある空間とともに、私は作品を以て創出することへの意思を示したい」という内容です。この思いからも伝わるように、本プロジェクトは美術館が企画する単なる絵画展ではありません。しかも美術館という館ではなく「美術」自体が町に繰り出すことにより、地域との関係を深め、生活の中へと溶け込むきっかけを作ることを目指しました。アーティストと会場と地域がコミュニケーションでつながり、文化の力を持って地域を元気にしようという思いが込められています。

昨年、定番化したアートを活用した地域連携型のプロジェクトを、「行政主導型のアートで町おこしが盛んな様」と揶揄する風潮が一部で見受けられますが、この全世界的な不景気の中で、多くの企業がメセナ活動から撤退あるいは休止し

ている今こそ、市民・企業・行政三位一体の協働をとる起爆剤、先導役を務めることが行政の責務ではないかと痛感しています。文化について誰もやれないことを行政がやらずして誰がやるのか!という気概をもっています。逆境の時代こそ、新たな変革を生むチャンスの時代到来とも受け取れます。分別とバランス感覚とを駆使した文化芸術に対しての支援を、暗闇のトンネルの先に明かりが見えるようになる時まで務めるべきでしょう。我々に何ができるのか、正直言ってわかりませんが、答えはすぐには出ません。従前から考えてはいますが、未だにこれといった明快な答えには至りません。

しかし、さらに考え続けようという「元氣玉」を、画家、パネラー、来観者、協力者等々多くの人たちからいただいた、今回のプロジェクトでした。次は、町のどこが「アート公民館」になるのか、今から楽しみです。

(小川順一郎/川口市立アートギャラリー(アトリア)館長)

